

金沢大学大学院教育学研究科国語教育専攻
金沢市立清泉中学校 教諭 高橋佐代子

研究主題 中学校古典教育の充実をめざして
～「おくのほそ道」を中心に～

要約： 本研究は、学習指導要領の改訂に伴い、これからの中学校古典教育のあり方について考察したものである。まず、中学校古典教育の現状と課題をふまえ、「古典嫌い」の生徒を作らないためにはどのような対策が必要かを検討した。

また、「おくのほそ道」の学習を中学校古典教育の集大成ととらえ、他教材との連関にふれながら、その指導のあり方に言及した。さらに、他の古典作品の指導においても、具体的に、4つの柱（創作活動、地域教材、ICT活用、他教科との連携）を立て、実践後の成果と課題についてまとめた。

キーワード： 中学校、古典教育、「おくのほそ道」

I はじめに

平成18年、教育基本法が改正された。改正を踏まえ、現行学習指導要領では、主に「読むこと」の指導事項に関連して古典を取り上げたただけであったのに比べ改訂学習指導要領では、「言語文化と国語の特質に関する事項」の中に古典に特化した指導事項を位置づけることになった。

こういう変化をふまえ、中学校では、小学校で触れてきた多様な古典の世界について体系化を図りつつ、さらに興味・関心がもてるようにすることを目標としなければならない。そのために我々中学校国語科教師は何をすればよいのだろうか。

II 研究の目的と方法

校種が違えば交流がほとんど無く、小学校や高校でどんな指導がされているのかは生徒の言葉から推察するだけであった。そこで、近年、小・中・高で行われている古典教育の実践をできるだけ集め、検討し、その成果や課題について考えてみることから始めた。

さらに、現在の中学生や高校生にアンケート調査や実践授業を自らも行い、それらをふまえて、今後中学校において、どのような古典の指導を実践していかなければならないかを考察していくこととした。

III 研究の内容

第1章 中学校古典教育の概要

第1節では、古典教育の現状について、小学校・中学校・高校段階別に主な実践の様子を調べ、どのような課題があるかを考察した。

高校段階では「古典嫌い」の問題が深刻であることがわかった。国立教育政策研究所教育課程研究センターが公表した「平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校）」では「古文・漢文が好きかどうか」という質問に対する「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」という回答は、合わせると、70%を超えていた。すなわち、日本の高校生の7割以上が「古典は嫌いだ」と考え

ているという結果が出ている。その理由の一つとして、「古典を学ぶ必要がない（実用性がない、必要がない）」という回答が挙がっていた。つまり、「何のために古典を学ぶのか」という疑問に教師が答えないままに古典指導を行っていることに原因があったと考えられる。そこで、「古典教育の意義」について、過去の主な論文を検討した上で、古典教育の意義を学習者の立場からまとめた。それは、①これまで受け継がれてきた我が国の文化遺産を継承すること、②昔から今に連なる多様な価値観を自己の内に形成すること、③言葉の奥行きを知り、日本語の豊かさを身につけることの3つである。これを念頭におきながら、古典の指導を行うことが重要であると考えた。

また、古典学習に先立って行った中学3年生と金沢市内の国語科教員に対する「古典学習（指導）に関するアンケート」の結果から、中学生においても「古典嫌い」が顕著であり、第一の理由は「言語抵抗の問題」であることがわかった。これに対し、「生徒は古典学習に意欲的である」とほとんどの教員が感じており、生徒との意識のずれが明らかになった。

そこで、古典の指導法改善に向けて、藤原¹⁾マリ子氏の意見を参考に、言語抵抗の問題への対処について、①文語調の文章に小学校の低学年から親しませる。②古典原文の採録形態を工夫する。というやり方を提案した。

第2節では、新学習指導要領における古典学習の変化について触れた。今回の学習指導要領の改善点は学校教育を挙げて「言語力」の育成に力を入れたことと、伝統的な言語文化（古典）の学習を重視したことである。具体的には、小学校の低・中学年から、古典などの暗唱により言葉の美しさやリズムを体感させた上で、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文などの古典や物語、詩、伝記、民話などの近代以降の作品に触れ、理解を深めることが重要であるとしている。さらに、小学校教育と中学校教育の連続性の確保を重視しており、「中学校学習指導要領解説・国語編」では巻末に「付録4」とし

て「各学年の目標及び内容の系統表」（小・中学校）が掲載され、以前から言われていた小・中の古典学習の系統性が目に見える形で表された。

私たち中学校国語科教師は今後いっそうアンテナを高く上げて、たえず変化する小学校古典学習の動向に注目し、それに応じた系統性のある古典学習を展開していかなければならない。

第2章 「おくのほそ道」の教材研究を中心に

第1節では「おくのほそ道」が紀行文学としても俳諧文学としても、また、優れた文学者松尾芭蕉の代表作としてもたいへん評価の高い作品であることを述べた。同作品は先行する数多くの古典作品を表現の表裏に織り込む手法を採用しており、そのため、教科書教材としての観点から見ると、中学校で学習した古典教材の総まとめとして、たいへん重要な役割を担っているといえる作品である。そこで、その特色や構成をとらえた上で、過去にどのような章段が教科書に採用され、現在はどういう取り扱いになっているのかを5つの教科書会社の各教科書で比較した。採録章段は昭和55年度版からほぼ「序章」と「平泉」（【教育出版】のみ加えて「立石寺」）に固定化されている。この2つの章段が採用されている理由は、「序章」は芭蕉の「旅」への思いや人生観を学ぶのに最適であり、「平泉」は、藤原三代の栄華の跡や義経主従の戦いの跡などを眺めることによって、人間のはかなさや人生の無常を観ずる芭蕉の心がよく表されている章段であるためであろう。また、この二つの章段は共通して、音読するのに適しているという点も挙げられる。

第2節では「おくのほそ道」と他古典教材との²⁾関連を中島和歌子氏の論文を参考にまとめた。

①「新古今和歌集」（西行歌）との関わり、②漢詩（杜甫『春望』・李白『春夜桃李園序』）との関わりなどを挙げ、系統的な指導の必要性を述べた。

第3節では「おくのほそ道」と石川県の関係について述べた。当時の加賀俳壇の状況や、芭蕉と小杉一笑や立花北枝らの関係、加賀の俳人たちとの交流の様子、また芭蕉の来訪が当地に与えた影

響などに言及した。

さらに、加賀の段の「おくのほそ道」における位置づけを宮³⁾脇真彦氏の意見をもとに考察した。同氏によると加賀の段は、それ以前の「歌枕探訪」を中心に展開していた旅ではなく、「人々との別れ」つまり、「離別」と「死別」の旅へ分け入り行く旅路であったという。そこで、「おくのほそ道」の中で異質な章段であるならば、それを活かした授業展開はできないものかと考え、「風雅の人々との出会い」に加えて「別れ」をテーマにした授業の発想を得た。

第3章 実践授業

第1節では、実践授業へ向けての事前調査として、アンケート調査を用い、小学校での古典学習の様子を把握した。結果、すでに小学校では有名な古典作品の文章の音読や暗唱がある程度行われていることがわかった。そして生徒は中学校で習う古典については、個人差はあるが、少しは知識や経験をもって入学してきていることもわかった。生徒は小学校の時、既に古典と出会っていたのである。

第2節ではアンケート結果をもとに、古典の実践授業を計画した。私が古典教育を通してつけたい力は「思考力」「表現力」そして「主体的に学ぶ力」である。それを実現するために古典の授業実践の柱を次の4つに絞って行うこととした。

〔古典教育を通してつけたい力〕

思考力・表現力
主体的に学ぶ力

〔実現するための手立て〕

1. 創作活動を取り入れた授業
2. 地域教材を活用した授業
3. ICTを活用した授業
4. 他教科との連携をはかった授業

以下、この4つの柱を据えた理由と、とりあげた教材について順に述べる。

1. 創作活動を取り入れた授業

創作活動を重視したのは、新学習指導要領において〔伝統的な言語文化に関する指導〕は「A

話すこと・聞くこと」「B 書くこと」及「C 読むこと」の指導を通して行うことになったからである。例えば、中学3年生において、「イ 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」といった活動例が書かれている。新学習指導要領に「創作活動」が明記されたことにより、今後いっそう、授業に創作活動を取り入れる傾向が強まることが予想される。

〈展開例〉「俳句をつくろう～芭蕉に学ぶ～」(1年)

・一度つくった俳句を、松尾芭蕉の推敲過程を参考に、お互いに推敲し合った後、句会を開く。

2. 地域教材を活用した授業

平成20年3月に石川県教育委員会事務局学校指導課が発行した「平成20年度 学校教育指導の重点」によると、「ふるさと学習」と「地域教材の開発」がこれからの教育にますます求められるようになる。石川にはあまり知られていない古典作品が多くあることは以前から知っていたが、授業で扱ったことはなかったため、生徒の興味・関心を高めるためにも、地域に関連した古典を授業でとりあげてみようと考えた。

〈展開例〉「夏草―「おくのほそ道」から―」(3年)

・石川県内の段を読んで俳句を鑑賞し、班に分かれて紙芝居をつくり、発表する。

3. ICTを活用した授業

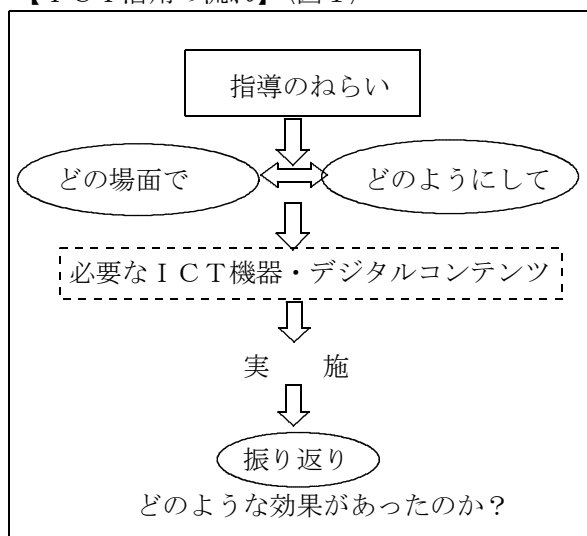
今回の学習指導要領の改訂により、情報教育や、教科指導におけるICT活用など、教育の情報化に関わる内容について一層の充実が図られた。そこで、教科指導におけるICT活用の中でも、授業での教員によるICT活用に重点を置き、実践を試みた。まずは周辺機器とデジタルコンテンツの特色、ICT活用の効果や問題点をふまえた上で授業に活用することを計画した。また、次のような流れ(図1)を、繰り返すことで、授業におけるICT活用の教育効果が上がることも示した。

〈展開例〉「蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から―」(1年)

・「10min Box」DVD、自作PP、「わくわく古典教室」、デジタル教科書を使用して、「竹取物語」概要説明、歴史的仮名遣いの説明、暗唱、

古語と現代語との対比を行う。

【ICT活用の流れ】〈図1〉



4. 他教科と連携した授業

今回の学習指導要領の改訂で、「各教科等における言語活動の充実」が重要な改善の視点として示された。もちろん「各教科」の筆頭である国語科の求められる役割は重大である。しかし、逆に他教科で学んだ知識や技能が国語科に活かされることも多い。例えば新学習指導要領で示された「ア 伝統的な言語文化に関する事項」の第3学年には「歴史的背景などを注意して読み、その世界に親しむこと。」という記述がある。古典の世界に親しむためには、歴史的な背景を知ることが非常に重要である。その作品の生まれた背景や作者の置かれた状況を知ることが、その作品の理解を深め、それによっていっそう生徒の興味・関心が高まることにもつながるからである。そこで、社会科と連携し、学んだ知識を古典の授業に生かしながら、互いに交流し合うことができれば、国語科にとっても社会科にとっても大いに成果のある指導となり、生徒の理解も深まると考えた。その他、美術科、家庭科、英語科、音楽科、総合的な学習の時間との連携も提案した。

〈展開例〉「夏草―「おくのほそ道」から―」（3年）

社会科―歴史の総復習の中で、松尾芭蕉と時代背景の説明をする、など。

第3節では、それぞれの実践授業の成果と課題について個別にまとめた。

IV 本研究の成果と今後の課題

①創作活動

「思考力」「表現力」に関しては、「創作活動」との関連で一定の成果を得たように思う。中でも「書く」という活動は作品として残り、それを交流したり推敲することにより、互いに磨き上げられていく良さがある。もっときめ細かい手立てをとって全員が時間内に完成できるようにしたい。

②地域教材

地域教材を取り入れたことで、興味関心がひきつけられ、主体的に学ぼうとする気持ちが生まれた生徒が多かった。今後、ますます「ふるさと教育」は盛んになると思われる。もっと地域教材を発掘し、授業に取り入れていきたい。

③ICT活用

導入部分ではICTを活用したことが非常に効果的であった。しかし、ICTはあくまでも一つの手段に過ぎない。発問や板書との組み合わせなど、授業のどの部分でどのようにICTを活用するとより一層効果的であり、生徒の興味や理解が深まるか今後さらに考えていきたい。

④他教科との連携

今年度はあまり実現できなかったが、来年度また練り直してぜひ実践したいと考えている。

以上、「4つの柱」を軸に、「3つのつけたい力」と、「おくのほそ道」との関連を意識しながら、実践を行ってきた。実践後の生徒へのアンケート結果を見る限り、ねらいはほぼ達成されたのではないと思う。本研究の主眼となる実践授業がいろいろな制約から、全部は実践できなかったことが悔やまれるが、今後ますます研究をかさねて、実践し、検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 藤原マリ子 (2004) : 「古典教育の再生を目指して ―高校生への意識調査をもとに―」 『国文学 言語と文芸』 明治書院
- 2) 中島和歌子 (2007) : 「中学校国語教科書における古典教材の選択と指導法について―『おくのほそ道』と他の詩歌の連環を中心に―」 (『国語国文学科』北海道教育大学札幌校)
- 3) 宮脇真彦 (1995) 「離別と漂泊 ―『おくのほそ道』加賀考―」 (『日本文学』)

